

## 松本清張の小説『熱い空気』にみる家政婦像

The image of the domestic maid as seen  
in Seichō Matsumoto's novel *Atsui Kuki*

清水 美知子\*  
Michiko Shimizu

### 抄録

本稿は、戦後日本を代表する作家、松本清張の中編小説『熱い空気』を資料として、1960年代前半の家政婦像について考察したものである。主人公は家政婦紹介所に登録する派出家政婦。彼女の目を通して中流上層家庭の内幕をのぞき見る、というかたちで物語は進行する。

この作品で描かれるのは、人格無視で機械のようにこき使われる家政婦の姿である。雇主からすると家政婦はよそ者であり、かつて住み込み女中とのあいだに存在したような温情的な関係は成立しない。家政婦の被虐意識は恨みに転化し、雇主の妻への復讐を計画、平和な家庭を崩壊の危機に陥れる。当時、日本では女中払底の対応策として、家政婦を家事技術者として位置づけようとする動きがみられた。しかし現実には、雇主側に家政婦を見下す意識が残っていたため、家政婦が専門職としてのプライドを持つことは難しかったのである。

### Abstract

Using as a text the short novel *Atsui Kuki* ("Hot Air") by Seichō Matsumoto, a leading author in postwar Japan, this paper considers the image of the domestic maid in the first half of the 1960s. The novel's protagonist is a daily domestic maid registered with a domestic maid agency. The story advances by peeking, through her eyes, into the inner workings of an upper middle-class household.

This work depicts the way the domestic maid is exploited like a machine, with no regard for her personality. From the employer's perspective, the domestic maid is an outsider, and no warm relations develop between the employer and the maid as had existed with the live-in maids of the past. At the time, a movement was apparent in Japan to position domestic maids as housework technicians, as a countermeasure against a shortage of maids.

---

\* 関西国際大学人間科学部

However, since in reality employers still looked down on domestic maids, it was difficult for domestic maids to take pride in their work as specialists.

## I ドラマ、小説における家事使用人

### 1. ドラマ『家政婦のミタ』の大ヒット

2011（平成23）年、大ヒットしたテレビドラマのひとつに『家政婦のミタ』<sup>1)</sup>がある。

初回の平均視聴率は19.5%と好調なスタートを切ったこの作品は、口コミで評判が広がり、最終回（2011年12月21日）の視聴率は40.0%に達した。「テレビ離れ」「ドラマ冬の時代」といわれる昨今、この数字は、21世紀に入って放送された民放テレビドラマとしては最高の記録である<sup>2)</sup>。ドラマのヒットを受け、予定していなかった関連グッズ（主人公が身につけるエプロンや所持しているドクターズバッグなど）が急きょネットで販売された。また、ロケ地となった動物公園の入園者数が増加したり、主人公の決めゼリフ「承知しました」「それはあなたの決めることです」が職場や学校で流行するなど、“家政婦のミタ現象”が起こった<sup>3)</sup>。

『家政婦のミタ』のストーリー<sup>4)</sup>をかいつまんで紹介しておこう。

母親を亡くしたばかりで、父親と子ども4人が暮らす阿須田家に、晴海家政婦紹介所よりひとりの女性が派遣されてくる。名前は三田灯（ミタ・アカリ）。あらゆる資格や技術を兼ね備え、依頼されたことは何でも完璧にこなす凄腕の家政婦である。いっぽうで彼女は、必要最低限のこと以外は口にしないうえ、決して笑わず、常に無機質な雰囲気を漂わせている。「殺せ」と命令されれば、包丁を持って一心不乱に襲いかかる。「家に火をつけろ」と命じられれば、躊躇することなく放火する。その型破りな言動は一家を振りまわすものの、結果として、バラバラだった家族をまとめていく。三田に信頼を寄せるようになった阿須田家の人びとは、彼女に心を開いてくれるように望む。しかし三田は、彼らに愛着を感じながらも、阿須田家から出て行く決心をする。なぜなら彼女自身が、壮絶な過去に由来する大きな心の傷を抱えていたからである。三田が阿須田家を去る日、一家は最後の業務命令として、契約上のタブーである「笑ってほしい」という願いを彼女に伝えた。

この作品がヒットしたのは、ドラマのつぼをおさえた巧みな演出もさることながら、作品のテーマが東日本大震災後の時代の雰囲気に共鳴したからであろう。家族を大切にしたいという思いが高まっているにもかかわらず、現実の家庭は大きく揺らいでいる。心に大きな傷を負った見ず知らずの家政婦が、最愛の人を亡くし崩壊に瀕した家庭を再生させる、というストーリーは、年齢や性別をこえ、幅広い層の人たちの共感をさそったのである<sup>5)</sup>。

くわえて、もうひとつ、このドラマで見逃せないのが〈家政婦〉という装置である。『家政婦のミタ』の脚本家・遊川和彦は、その点について次のように語っている。

「ホームドラマをやりたい」と持ちかけられた時は、率直に難しいなと思いました。ボクはこれまでけっこうホームドラマを書いてきてもうネタはないし、って。でも、ふと「家政婦」はうちの中にいる唯一の他人だから、主人公にしたら面白いんじゃないかと。じゃあ彼女の名前は「ミタ」にしよう。タイトルだけで面白がってもらえるんじゃないかと（傍点引用者）<sup>6)</sup>。

21世紀の日本において、〈家政婦〉は多くの人にとってなじみの薄い職業である。総務省統計局の職業分類によれば、〈家政婦〉は、中分類「家庭生活支援サービス職業従事者」のなかの、小分類「家政婦（夫）、家事手伝い」に属し、「個人の家庭又は個人などの求めに応じて、調理・育児・洗濯・掃除・介護などの生活を支援するためのサービスの仕事に従事するもの」に分類される<sup>7)</sup>。2005（平成17）年の国勢調査では、〈家政婦〉〈家事手伝い〉など家事使用人の仕事に従事する人は、男女あわせてわずか27,889人にすぎない<sup>8)</sup>。

『家政婦のミタ』では、家政婦という職業の珍しさが逆に人びとの興味を引き、三田の目を通して描かれる家族の物語は、“これまでにない新しいホームドラマ”として受けとめられた<sup>9)</sup>。家庭内に存在する家政婦は、いわば家庭のなかに置かれた“他者の目”である。無表情な三田が阿須田家の人びとに向けて発する辛辣なことばの数々は、家庭内の唯一の他人による内在的批判だからこそ、迫力があったといえよう。

## 2. 小説のなかの家事使用人

こんにち、家政婦や家事手伝いなどの家事使用人を置いているのは、『家政婦のミタ』の阿須田家のように特殊な事情を抱えている場合をのぞけば、富裕な家庭にかぎられる。しかし、昭和時代も前期までは、とりたてて豊かでもない中流の家庭に家事使用人がいるのは珍しいことではなかった。たとえば、1930（昭和5）年の国勢調査では、住み込みの家庭女中は約70万人。家族従業者の多い農林水産業従事者を除けば、被雇用者として働く女性のうち6人に1人が女中という計算になる。家事雑用に立ち働く使用人の姿が日常ありふれた情景であったことは、日本近代文学の多くの作品において、ねえや、ばあやといった女性たちがひんばんに登場することからも明らかである。

戦後になっても、家事使用人として働く女性は少なくなかった。1950（昭和30）年の国勢調査によれば、住み込みの女中は30万人にのぼり、紡績工、事務員とともに女性の四大職業のひとつに数えられた。家事使用人が日本の一般家庭から消えていくのは、いわゆる高度成長期のこと。昭和時代の中期になってもなお、家事使用人は人びとにとってなじみのある存在であった。それは1950年代、60年代に発表された小説のなかでも、家事使用人が主要な登場人物としてしばしば描かれていたことからもうかがえる<sup>10)</sup>。

もっとも、小説における家事使用人の描かれようは、時代とともに変化する。たとえば、家事使用人をあらわすことば一つとっても、明治時代の作品には〈家婢〉〈下婢〉〈下女〉が多かったのが、大正時代から昭和前期にかけての作品では、〈女中〉が一般的になる。そして、昭和30年代も後半に入ると、〈女中〉は〈お手伝いさん〉や〈家政婦〉に取ってかわられる。家事使用人と雇主との関係や家庭内における家事使用人の位置づけも、昭和時代の前期に発表された作品と中期の作品とは異なる。

「文学作品は第一級の歴史・民俗資料」<sup>11)</sup>と社会学者の上野千鶴子が指摘するように、小説は自由な想像力を駆使して時代と社会を生き生きと描き出す。が、言い換えれば、小説もまた社会状況の産物にすぎず、それを生み出した時代と切り離して考えることはできない。小説は“社会をうつしだす鏡”なのである。

家事使用人が登場する小説を通して、日本の家庭や家族、ひいては社会について考えてみることはできないだろうか。筆者はそのひとつの試みとして、1920年代から30年代の雑誌や新聞に

発表された小説を資料として、大正末期から昭和前期の中流家庭における主婦と女中の関係について考察したことがある。小説に描かれる温情的な主従関係は、当時の中流階層の人びとが理想としていたものであり、作家はその時代の社会心理を的確にとらえたうえで、当時の風俗や事象をとりいれつつリアリティある物語を創り上げたことが明らかになった<sup>12)</sup>。

本稿では、対象とする時代を昭和時代の中期とし、松本清張の家政婦を主人公とした小説『熱い空気』(1963年)をテキストとしてとりあげる。

先述のとおり、家庭内に存在する家事使用人は、家庭のなかに置かれた“他者の目”である。とくに家政婦は、必要なときだけ、請負契約のもとづいて家事労働を遂行するため、家庭内に常時住み込み、主従関係のもとに縛られている女中に比べると、独立性が高い。小説に描かれた家政婦像の分析を通して、当時の家政婦がおかれた状況や主婦との関係について考えてみたい。

## Ⅱ 松本清張『熱い空気』について

### 1. 松本清張の小説

松本清張(1909～1992年)は、周知のとおり、戦後日本を代表する作家のひとりである。

清張は、41歳という遅いデビューにもかかわらず、約40年の作家生活のあいだに、随筆や日記も含め約980篇の作品を発表、編著もあわせて約750冊の著書を刊行した。文学の選評、自著「作者の言葉」、他人の著書への推薦文など短文もくわえると、作品総数は1000篇を超える<sup>13)</sup>。膨大な作品群から代表作のごく一部をあげると、出世作となった芥川賞受賞作『或る「小倉日記」伝』(1952年)、トラベルミステリーの先駆的作品『点と線』(1958年)、ベテラン刑事の執念の捜査を描いた社会派ミステリー『砂の器』(1962年)などがある。

「清張以後」ということばがあるように、松本清張の登場によって日本における推理小説の作風は大きく転回した。すなわち、従来の推理小説がもっぱらトリック一辺倒であったのに対して、清張の小説は犯行の動機を重視し、動機の担い手とそれを取りまく社会に鋭く迫る、という特徴をもつ。松本清張の出現により、社会派の推理小説がいわゆる本格派の推理小説にとってかわったのである。

清張作品のジャンルは推理小説にとどまらず、時代小説、歴史小説、評伝、自伝、日記、紀行、古代史論など多岐にわたる。多角的な着想や緻密な調査・研究にもとづく小説の数々は、研究者からの評価も高く、小説家のレヴェルを超えと言われる<sup>14)</sup>。『松本清張事典 決定版』を著した郷原宏は、「質量ともにこれほど充実した作品を残した作家はほかにはいない。清張が生前から巨匠と呼ばれたゆえである」と評している<sup>15)</sup>。

松本清張の小説はまた、映画化、テレビ化されたものが非常に多い。1979(昭和54)年には、清張作品を映像化する会社も設立されている<sup>16)</sup>。『松本清張作品研究』の著者加納重文によれば、松本清張の原作になる映画、テレビドラマは、2007(平成19)年までに360本(映画35本、テレビドラマ325本)。何度も映像化された作品の重複をのぞき、延べでなく実数で再計算したところ、その数は170篇。小説作品のじつに約37%が映像化されたことになる<sup>17)</sup>。

### 2. 『熱い空気』と『家政婦は見た!』

本稿でとりあげる『熱い空気』は、雑誌『週刊文春』1963(昭和38)年4月22日号から7月8

日号まで、シリーズ「別冊 黒い画集」第2話として連載された中編小説である。同年9月、第1話とともに短編集『事故 別冊黒い画集』として文藝春秋新社より刊行された。同書の裏表紙には著者の近影とともに、以下のような紹介文が掲載されている。

清張さんはまったく驚異の作家である。その健筆ぶりはあまりに有名だが、すでに作品の数は長、中、短篇合わせて200篇以上、原稿の枚数にひきなおせば4万枚を越える膨大なものである。昭和27年下半年の芥川賞受賞が作家としての出発点であるから、ちょうど10年選手——その間にこれだけの量の作品を発表した作家は未だ嘗てない。しかも、内容においても常に高いレベルを堅持して来たのだから、希有のことといえよう。(中略) この「別冊黒い画集」は、記念すべき200篇目にあたり、日常性の中の悪の詭弁を衝く、熱のこもった力作である<sup>18)</sup>。

『熱い空気』は2012(平成24)年までに4度、テレビドラマとなっている。表1は放映時期や主な出演者などについてまとめたものである。

表1 松本清張『熱い空気』を原作とするテレビドラマ

放送年月日	ドラマタイトル	番組名	放送局	制作会社	脚本	監督	主な出演者(役名)
1966年 3月8日	熱い空気	松本清張 シリーズ	フジテレビ	関西テレビ	田村猛	水野匡雄	望月優子(河野信子) 楠田薫(稲村春子) 渡辺文雄(稲村達也)
1979年 2月8日	熱い空気	東芝日曜 劇場 松本清 張 おんなシ リーズ	TBS	TBS	服部佳	鴨下信一	森光子(河野信子) 林美智子(稲村春子) 長門裕之(稲村達也)
1983年 8月2日	熱い空気 家政婦は見た! 夫婦の秘密 「焦げた」	土曜ワイド 劇場	テレビ朝日	大映テレビ	柴栄三郎	松尾昭典	市原悦子(河野信子) 吉行和子(稲村春子) 柳生博(稲村達也)
2012年 12月22日	熱い空気	開局55周年記 念/松本清張 没後20年ドラ マスペシャル	テレビ朝日	テレビ朝日 /東映	竹山洋	松田秀和	米倉涼子(河野信子) 余貴美子(稲村春子) 段田安則(稲村達也)

【出所】林悦子『松本清張 映像の世界』ワイズ出版、2001年、pp.168-191およびテレビ朝日HP  
(<http://www.tv-asahi.co.jp/atuiukuiki/>)より作成

このうち、3度目の映像化作品である「熱い空気 家政婦は見た! 夫婦の秘密 “焦げた”」については、製作をめぐり以下のようなエピソードがある。

この作品は1年以上も前に制作されたものの、「殺人のない2時間ドラマは例がなく、引きが弱いからと企画書がともらなかった」<sup>19)</sup>ため、長らく放送されないでいた。ところが、いざ放送してみると、家政婦という役柄が市原悦子の庶民的なイメージにマッチし、27.7%という高い視聴率を記録した。殺人事件がなくても視聴率が取れる。テレビ局がシリーズ化を原作者である松本清張にもちかけたところ、清張は「作品は一本一本が勝負であって、好評だからといって二匹目のドジョウを狙う姿勢は自分にはない」<sup>20)</sup>と断った。そこで、テレビ局はオリジナル脚本による市原悦子ふんする家政婦ドラマを製作。ドラマのタイトルを『熱い空気』から『家政婦は見た!』に変え、主人公の役名も変更したうえで第2話として放送した。

『家政婦は見た!』は、第1話も含めると25年間で計26話が放映され、日本の“家政婦ドラマ”を代表する作品となった。先にとりあげた『家政婦のミタ』も、そのタイトルは明らかに『家政婦は見た!』を想起させ、番組宣伝用のポスター（ドアに半身が隠れている家政婦三田のポーズ）も、『家政婦は見た!』でおなじみのものである<sup>21)</sup>。もっとも、第2話以降の役名（主人公の名前は石崎秋子）がシリーズを通して定着したため、第1話の原作者が松本清張であることは、あまり知られていない<sup>22)</sup>。

筆者が『熱い空気』という小説に着目する理由は三つある。第一は、主人公に〈家政婦〉をすえ、家政婦の視点から当時の中流上層の家庭を描いた作品だからである。第二は、〈家政婦〉が女中に代わるひとつの職業として、社会で認知されはじめた時期に発表された作品だからである。そして第三は、主人公の心理描写が巧みであることにくわえ、当時の社会関係や社会意識がリアリティをもって描かれており、“社会心理の文学”として読むことができるからである。

### Ⅲ 「熱い空気」にみる家政婦像

#### 1. 家政婦の歴史

##### 1.1 派出婦の誕生

作品の内容に立ち入って分析する前に、〈家政婦〉という職業の歴史について述べておきたい。

家政婦という職業のルーツは、大正時代にまでさかのぼる。その背景には当時、都市部で深刻化していた女中払底がある。家庭の手不足を補う方策として、第一次世界大戦後の1918（大正7）年、〈派出婦〉と呼ばれる、家政一般の仕事をおこなう臨時雇いの女性を派遣する事業が、東京・四谷の婦人共同会により考案された。看護婦を派出する会は1890年代から見られ、すでに各地に定着していた。しかし、家事を専門とする派出婦会の設立は、これが嚆矢とされる。派出婦会はその後、大都市を中心に普及し、昭和初年には東京に200余カ所、大阪に約30カ所、神戸、京都、名古屋、横浜の各都市に15～20カ所を数えるにいたった<sup>23)</sup>。

派出婦が女中と大きく異なるのは、①契約にもとづく臨時雇いである、②住み込みのみならず通勤も認めている、③勤務時間があらかじめ決められている、などの点である。派出婦は当初、仕事の内容により、料理婦、裁縫婦、洗濯婦、給仕婦、美容婦、病産婦付添婦、雑用婦など細かく分かれていたが、台所一切から掃除、洗濯など何でもこなす雑用婦の需要が高かったことから、派出婦といえば家事全般をこなす雑用婦のイメージが定着していく<sup>24)</sup>。

派出婦と女中はまた、属性においても違いがみられる。たとえば、1937（昭和12）年に横浜社会課がおこなった調査によれば、女中の8割以上が10代から20代前半の未婚者であるのに対し、派出婦では30歳以上が6割を占め、未婚者は3人に1人にとどまっていた。さらに、就労理由においても、派出婦と女中では大きく異なる。すなわち、未婚若年者が多い女中では結婚費用を稼いだり、家事の知識・技術を身につけるために働いている者が多いのに対し、派出婦のほうは生活費を稼ぐため、家計を支えるために働く者が大半を占めるのである<sup>25)</sup>。

日本の女中はもともと、行儀見習いや家事修得など“修行”の性格を有していた。女中と雇い主との関係は、対等な家事サービスの売買関係ではなく、働く者を人格も含めて身ぐるみ抱え込む主従関係であった。そこに“契約関係”をとりこんだという意味で、派出婦の登場は、家事使用人のイメージを変える契機となった。

とはいうものの、大正・昭和前期において、派出婦は女中に代わる一大職業に成長することはなかった。1930（昭和5）年の国勢調査によれば、約70万人の家事使用人のうち、通勤形態のものは3万人弱にすぎない。圧倒的に住み込み女中が多かったのである<sup>26)</sup>。

## 1.2 派出婦から家政婦へ

派出婦に大きな転機が訪れるのは、第二次世界大戦後のことである。

1947（昭和22）年に「職業安定法」が施行され、派出婦や看護婦の有料職業紹介事業が禁止された。翌年、看護婦は“特別な技術を必要とする職業”として有料職業紹介が認められたものの、派出婦は認可対象とならなかった。しかし、許可を受けないままもぐり営業を続ける派出婦会が続出し、違反行為は後を絶たなかった。そのため1951（昭和26）年、労働省告示により派出婦を〈家政婦〉と名称変更して指定職種、すなわち“特別な技術を要する職業”に追加、家政婦の有料職業紹介事業が認可された。この時、すでに事業をスタートさせていた「看護婦紹介所」の多くが「看護婦家政婦紹介所」の看板をかかげることになった<sup>27)</sup>。以後、派出婦に代わって、〈家政婦〉ということばが一般化する。

昭和30年代に入ると、国の主導により、家事サービスをひとつの職業として確立しようという動きもみられる。たとえば、1956（昭和31）年、東京・新宿に「家事サービス公共職業補導所」が開設された。これは、東京都が国の補助を受け、未亡人等を対象に家政婦に必要な衣食住、育児、看護などの知識と技術を習得させ、修了生を一般家庭に派遣するというもの。この家政婦養成事業は、当時、社会問題化していた戦争未亡人の就職対策になると同時に、“家事技術者”という新しい女性の専門職を創出し、女中払底の緩和をはかるねらいもあった。家事技術者を養成する試みは好評をえ、大阪、名古屋、神戸、京都など主要都市に養成施設が開設された<sup>28)</sup>。

また、1960（昭和35）年には、労働省が「事業内ホームヘルプ制度」普及・推進を発表した。この制度は、労働者家族福祉対策の一環として、事業所が家事援助をおこなう女性を常用で雇い、従業員家庭で手不足が生じた場合に低料金で派遣するというもの。同年には、東京と大阪でホームヘルパーの養成講習が始まった。ホームヘルパーは従業員として派遣されるため、身分的に保証されており、従来の女中のように雇主とのあいだに身分関係もない。事業内ホームヘルプ制度は、働く人、利用する人、採用する人いずれにとっても魅力のあるものとして歓迎された<sup>29)</sup>。

大正時代に誕生した〈派出婦〉は、女中払底を背景に家庭の手不足を埋める、いわば代替的な存在であった。それが昭和も中期にさしかかり、プロの職業人としてにわかに注目をあつめるようになった。農村の娘たちの主要な働き口であった住み込み女中の仕事は、家政婦という中年女性の職業へとシフトしていく。本稿でとりあげる『熱い空気』は、ちょうどその移行期に発表された作品である。

## 2. 家政婦という職業

### 2.1 家政婦になった理由

『熱い空気』の主人公は、東京・渋谷の「協栄家政婦会」に所属する河野信子（コウノ・ノブコ）である。年齢は32歳。家政婦として働きはじめたのは3年前、夫の浮気が原因で離婚してまもなくのことであった。この作品では冒頭において、主人公が家政婦になった理由が次のように語られる。

手に技術を持たない32の女が、破壊された家庭を出て、どのような職業に就き得るだろうか。それは新聞の3行案内の求人欄を見ると一ぺんに分る。料理屋のお座敷女中、旅館の下働き、保険の集金人といった類いである。その他、バーやキャバレーのホステスがあるが、これは若くて顔がきれいでないと備って<sup>30)</sup>くれない。

当時、女性は結婚すると家庭に入るのが一般的であったから、夫と離別・死別するとたちまち窮地に追いやられた。河野信子（以下、信子と略す）が家政婦の仕事についたのも、もっぱら生活のため。他に適当な職がみつからなかったからである。「一時の腰掛け」のつもりがずるずると今日まで及んでいる。「お手伝いさんの口ならいくらでもあった（傍点引用者）」が、彼女は個人の家庭に長く辛抱している気持ちになれなかった。その点、家政婦は契約期間だけの短い雇用関係だから、大して苦にならない。

この作品が発表された1960年代前半、東京では“女中払底”が社会問題となっていた。高度成長期に入り商工業分野での求人が激増し、若い女性にとって、女工や店員、事務員など女中以外の選択肢が増えたからである。女中のなり手がない状況を打開するために、パートタイム制や通勤制が積極的に導入されたのもこの時期である。派出家政婦はいくら人数がいても足りない状態だったから、中高年の女性でも家政婦ならば仕事に事欠くことはなかった。

## 2.2 家政婦紹介所の実情

つづいてこの作品では、主人公の目を通して、彼女が所属する家政婦紹介所の実情が語られる。協栄家政婦会の会員（家政婦）は100人を越している。年齢は、最も若くて28,29歳で、50歳をすぎた女も少なくない。会員は「稼ぎ高の8分」を会費という名目で、会に納める取り決めになっていた。協栄家政婦会には、仕事が済んで帰ってくる会員のために、アパート式の寄宿舎があった。もっとも、住み込みで働いているほうが多いために、寄宿舎に残っているのは、健康をそこねている者か、疲労のため休養している者に限られた。寄宿舎での食費は「朝が50円、昼と夜がそれぞれ100円」である。

上記の説明は、当時の家政婦の実情にほぼ見合ったものといえる。家政婦紹介所から派遣された家事使用人については、労働省婦人少年局が1960（昭和35）年5月におこなった面接法による調査<sup>31)</sup>がある。同年の全国家政婦紹介所に登録する家政婦推定数はおよそ39,000人。この調査では、9都道府県11都市の通勤家事使用人を使用する721世帯とそこに働く701人の家事使用人から回答を得た。

同調査によれば、家政婦の平均年齢は42.7歳。離死別者と未婚者をあわせると半数を超え、有夫者を上回る。家政婦になる前は「家庭の主婦」という者が6割近くを占め、家政婦になったのは9割近くが経済的な理由から。1カ月の労働日数は、月に25日以上働いている者が半数近くにとぼり、1日の労働時間は10時間以上が6割を占める（平均10.2時間）。当時の女性労働者の全産業平均8.0時間（従業者30人以上）や8.8時間（同1～4人）と比較すれば、家政婦は拘束時間がきわめて長い職業であることは明らかである。給与については家政婦紹介所の規定料金が定められており、日給ベースが大半で、1日平均365円（ただし通勤の場合）。家政婦紹介所に払う登録料は、「日給の8分」という者が約半数を占める。



## 2.3 家政婦の仕事

他人の家で長時間にわたって拘束される家政婦の仕事は、辛いことも多かった。主人公の信子が「辛い」と感じるのは、大ざっぱに言って三つに要約される。

第一に、個人の家庭に日給で雇われる仕事のため、かなりの重労働である。「高い賃金で働いたという観念がどこの家の主婦にもある」から人使いが荒い。「住み込みの女中なら、気をつかって仕事の分担もなるべく軽くしてくれるが、一時の臨時女中だから先方も遠慮がなかった（傍点引用者）」<sup>31</sup>。第二に、休養時間というのがあまりない。家政婦会では「拘束時間は1日10時間」「実労働は8時間」と規定されているものの、家庭内の仕事は労働と休息のけじめがはっきりしない特徴があるため、「拘束10時間」を越えることはふうつつうである。だらだらと遅くまで働き、風呂に入って寝るときは11時、12時になるのは珍しくなかった。そして第三に、家政婦の人格は徹底的に無視される。「家政婦はあくまでビジネスだという気持ちで割り切って、どんな家庭に入っても、感情の移入は許されない（傍点引用者）」のである。

上記のような辛さを除けば、「食事向う持ちで1日850円」「月平均2万5千円」という収入<sup>32)</sup>は決して安いものではない。手に技術のない中年女性にとって家政婦という仕事は「不利ではない」と信子は考えている。

子供を持たない信子は、ほかの家政婦仲間のように仕送りする必要もなかった。娯楽といえば、たまに映画に行くくらい。着物を買うことも、贅沢な食事をすることもなかった。稼いだお金はもっぱら貯金に回し、不時に備えている。同僚が「あんたが病気のときは、わたしが無償で付き添ってあげるわ」といっても、信子はまったく信用しない。「何といっても他人が云うまに働いてくれるのは金の力（傍点引用者）」なのである。

信子は寡黙で手際よく家事をこなすことから、どこの家でも重宝がられ、前に雇った家から指名されることも少なくなかった。しかし、彼女は前に働いたことのある家庭には興味がなかった。どんなに幸せそうに見える家庭にも必ず不幸はある。「他人の家庭を次々と見て回って、その家の不幸を発見する」のが「密かな愉悅」だったからである。

家事をしながら、絶えず家の中の気配に聞き耳をたて、家族それぞれについて細かに観察する。たとえば、若い主婦と年配の主婦との態度を比較して信子は次のように考察する。

主婦の態度も、二日ばかりは家政婦に対して遠慮がちだが、あとは露骨に命令的となる。尤も、ほとんどの場合、年配の主婦のほうが人使いが荒いといっていい。これは戦前の「女中」の観念がつづいているからだ。人格無視も、このような人たちに多かった。それに比べると、彼女より年の若い主婦のほうがずっと気を遣ってくれた。戦前と戦後の教育の違いだろうか。しかし、これも実際に云うと上辺だけで、ずる賢さにおいては、年取った主婦よりも若い人に多い場合がある（傍点引用者）<sup>33)</sup>。

『熱い空気』では、この鋭い観察眼をもつ家政婦が、新たに雇われることになった家庭の不幸を探り出す、というかたちで物語が進行する。

## 3. 稲村家の人びと

河野信子が今度住み込みで勤めることになったのは、東京・青山高樹町にある稲村家。42歳で

大学教授の達也、38歳で専業主婦の春子、中学2年を頭とする3人の男の子、それに80歳になる達也の母からなる6人世帯である。稲村家では1カ月前に住み込みのお手伝いさんが辞め、代わりがみつからないため、やむをえず家政婦を申し込んだという。信子は次のお手伝いさんがみつかるまでの、いわば“つなぎ”であった。

食事持ちで月に2万円を越える支出は、協栄家政婦会の会長いわく、「まあ、サラリーマンとしては、これくらいのところから家政婦を使ってもいいという、ギリギリのわけね」。しかし、朝8時ごろ稲村家に着いた信子は、出勤する夫の達也を一目みて、一家の経済状態がよいことを見抜いた。

小暗い廊下には長身の男が鞆を提げて立っていた。着ている洋服は上等で、趣味も悪くない。(中略) 主人の着ている物と、家庭内の程度とにあまり落差がありすぎると、その家庭が実際は貧困だということが分かるし、ほぼ同じ程度だと、わりあい豊かということが知れる。この場合、稲村家はその釣合がとれているほうだった<sup>34)</sup>。

妻の春子は体裁屋。見た目は「威厳と慈愛」に満ちているが、「それは彼女を飾り立てる虚栄である」ことを、信子は稲村家に着いて30分で読み取った。優雅な言葉つきにもかかわらず、春子が細かい性格であることもしだいに分かってきた。たとえば、信子を市場に行かせる際、「ジャガイモ3個だとか、ネギ2本だとかいう買物さえ覚えて辞さなかった」からである。

3人の子供のうち、中学2年の正一は乱暴者でタバコを吸うなど、不良性を帯びている。小学5年生の明次は、プラモデルに夢中で、それ以外は左の物を右にも動かさない性格。末っ子の健三郎は、口の利きようが6歳と思えないくらいこましゃくくて生意気だった。主人の達也といえ、真面目で外ではほとんど酒を飲まず、家に居てもむっとりとしてほとんどものを云わなかった。稲村家では嫁姑の仲が非常に悪く、姑は家の奥にある4畳半に押し込められ、3度の食事も自室でとっている。信子は嫁と姑の双方からさんざんに愚痴を聴かされた。家族バラバラな稲村家の人びとをみて、「この家には確かに不幸がある」と信子は思った。

稲村家に来て2週間ほどたったある晩、信子は偶然に、夫婦の会話を立ち聞きする。「今度来た家政婦」という春子のことばに、信子は聞き耳を立てた。

わたしの見ていない所では、ずいぶんと怠けるのよ。いかにも仕事をしているような恰好をしているけれど、ちっとも仕事が片付いていないわ。あの家政婦はいろいろの家に行って女中仕事をして回っているから、すれっからしなのね。(中略) 子供たちもあの家政婦を嫌ってるわ。わたしの居る前では子供たちの云うとおりになっているようだけれど、陰ではしかり飛ばしてるそうね。それに、お婆ちゃまの部屋に始終行って、何かとわたしの悪口を聞き出したがるそうよ。あんな女、大嫌いだわ。高い賃金を払ってばかばかしい。ほかに人が居ないからしかたないけれど、代わりが来たら、その日の朝でも帰したいわ<sup>35)</sup>。

主婦が家政婦の悪口を言うのは珍しいことではない。しかし、ここまで露骨に罵られたのは、信子にとっては初めての経験であった。そのくせ春子は、信子の前に出ると体裁ぶった口を利き、もの分かりのいい奥様といった恰好をする。たとえば、「あら、もうご飯の用意が出来ているの。

早いわね。やっぱりあなたでないと駄目だわ。前にいた女中はみんな若いから、気が利かないってなかったのよ。助かるわ」というように。

子供たちの態度にも我慢ならない。上の二人は、信子のことを頭から女中として見下し、ろくに口も利かない。用事を言いつけることだけは命令的で、容赦がなかった。末っ子の健三郎は、信子と呼ぶのも「おばちゃん」ではなく「おばさん」と言い、気に入らないと罵倒する。春子は、その場に居合わせても決して止めようとはせず、「見て見ぬ振り」である。信子には、「春子の心にひそんでいる信子への反感が、子供に代償行為をさせている」としか思えなかった。

この稲村家を出るまでに、一家に何らかのかたちで仕返しをしてやらねばならない。信子はそう決心した。しかし、信子が最も望む稲村家の「不幸の因子」は隠れていて、それを利用するほどの手がかりはなかなか見つからなかった。

#### 4. 復讐する家政婦

ある日、末っ子の健三郎がマッチ遊びでボヤ騒ぎを起こす。そのマッチが何ですって火が付く特性を持っているとわかり、信子にある考えがひらめいた。その晩、達也宛の速達便が届く。茶封筒の宛名書きが女文字であることを直感した信子は、封じ目に湯気をあてて開け、手紙を盗み見る。それは富美代という女性からの密会の誘いであった。達也は浮気をしていたのである。

信子にはまだそんな経験がなかった。彼女より若い家政婦のなかには、それらしい浮気をする同僚もいないではない。しかし、彼女のことを男の誰も誘ってくれなかった。年齢も取っているし、顔も醜い。しかし、そのような情事への憧れは人一倍だった。それだけに他人のことには腹が立ってくる。彼女は、それを自分の潔癖感だと心に思いこませていた<sup>36)</sup>。

達也の姿が、信子を裏切った元夫の姿と重なってみえたのであろう。達也が女と外泊することを知り、信子はある考えを実行に移すことに決めた。信子の稲村家への復讐劇ははじまる。

翌日、春子の留守中に、健三郎が祖母（姑）の耳をマッチで搔いて大やけどを負わす、という事件が起こった。ほかでもない。例の特殊なマッチで祖母の耳掃除をしてあげてはと、信子が健三郎にしむけたのである。姑は救急車で病院に運ばれ入院する。その日はちょうど、達也が研究会のため水戸に出かけると偽り、浮気相手と外泊した日であった。姑の入院を夫に知らせるため出張先の大学に電話した春子は、夫が水戸には行っていないことを知り、愕然とする。

信子は稲村家に“熱い空気”を引き起こすことに成功した。姑の事故と夫の所在不明とで混乱する春子をみて、信子は満足感をおぼえる。日ごろ、「高慢ちきで、お体裁屋で、陰口ばかりを利いている彼女がうちしおれている」のをみて、「ひそかな復讐感」に浸った。しかし、まだこれくらいでは満足できない。信子は、春子には内緒で達也の友人である大学教授、一条藤麿を訪ね、外泊先の達也に母親の入院のことを電話で知らせてくれるよう頼んだ。電話をかける一条を見て、彼女は腹のなかで舌を出す。

こんなにうまく計画が着々と進むとは思わなかった。これで春子にも懊悩を味わせ、達也にも苦痛を与えているわけである。体裁ぶって陰口を利く春子はもとよりだが、あのむずかしい本を背にして、しかつめらしいポーズをとっている稲村教授が、女と周章狼狽している様

子が痛快でならなかった<sup>37)</sup>。

達也が帰宅した翌朝、彼が浮気相手と泊まった熱海のホテルでチフス患者が出たことが報じられる。新聞をみて達也はうろたえた。信子は追い打ちをかけるように、達也が泊まり客であることを知らせるハガキを熱海警察署あてに書いた。その日、姑の言いつけで、春子の妹、寿子の家に電話をかけた信子は、寿子の夫から妻がチフスの疑いで入院すると知らされる。達也の浮気相手は、意外にも春子の実の妹であったのだ。成り行きしだいでは、二つの家庭が崩壊するかもしれない。春子が夫と離婚した場合をあれこれ想像し、信子は仕返ししたような気分になった。

春子のことだから、教授夫人という自負が当分くっ付いて回るにちがいがなかった。そこは見栄坊の女のことだ。まさか小さな商店の女事務員でもあるまい。だが、その虚栄心も束の間で、彼女の生活が苦しくなってくると、結局は自分のような家政婦などに落込むのではなからうか。そのときこそ、春子は信子の立場を身をもって理解するわけである。他人の家に働くということがどのように辛いことか、自由の束縛、貯蓄の心細さ、他人からの軽蔑、家族への気がね、その苦悩を春子はしみじみと味わうことであろう<sup>38)</sup>。

他人の家に入って働くのは辛いが、これだから嬉しい。快い想像は果てしなく広がり、夕飯の支度がおっくうになった信子は、小料理屋に天丼を注文する。そして——。ひとり夢中になって天丼を食べている信子の耳に、火のついた一本の竹矢が命中する。それは“アパッチ族遊び”に興じる末っ子の健三郎が発したものだ。彼女は、予期せぬ裁きを受けたのである。

#### Ⅳ むすびにかえて

この作品で特筆すべきは、主人公の家政婦が徹底した“性悪女”として描かれている点である。近現代の文学作品において、家事使用人が主人公もしくは狂言回しとして登場する小説は少なくないが、そこでは“主人大事と一心につかえる女中”というように、どちらかといえば家事使用人の健気さが強調されてきた<sup>39)</sup>。これに対して『熱い空気』の主人公信子は、他人の家庭の不幸を見いだすのが愉しみという、きわめて陰湿なキャラクターとして設定されている。しかも彼女は、家庭の秘密や欺瞞を暴くにとどまらず、その家庭を崩壊の危機に陥れる。こうした悪女キャラは、従来のいわゆる女中小説ではみられない人物像である。

いったいなぜ、このような家事使用人像が成立するのであろうか。それは『熱い空気』において、家政婦と雇主の家族とがまったくの“他人”として描かれているからである。

たとえ、この家に嵐が吹きまくってしようと、崩れかけようと、自分の知ったことではない。自分は、この家とは無縁の他人である。あたかも、春子が信子を他人視してきたと同様である。高みの見物をしていればよい（傍点引用者）<sup>40)</sup>。

先に述べたとおり、日本における雇主と住み込み女中との関係はもともと、働く者をもふくめて身ぐるみ抱え込む温情的な主従関係であった。住み込み女中の多くは結婚前の若い女性である。

“家事見習”という名のもと、女中は雇主から生活のすみずみまで干渉されるのと引き換えに、“準家族”として扱われた。これに対し家政婦は、契約にもとづき、家庭生活のうち家事のみを切り離して事務的に処理する使用人である。したがって、雇主と家政婦のあいだには“温情”のようなものは成立しにくい。

もっとも当時、雇主と家政婦とのあいだに<sup>よそ者</sup>対等な労働サービスの売買関係が成立していたかといえ、必ずしもそうとはいえない。稲村家のようにずっと住み込みの女中を使ってきた家庭では、大人のみならず子供までもが家政婦を一段低いものとして蔑んだ。女中払底の折から、いちおう丁寧に扱われているが、相変わらず人格は無視されていた。法律や制度は変わっても、人びとの意識は急には変わらない。“特別な技術を必要とする職業”とは名ばかり。家政婦は専門職としてのプライドを持つことが難しかったのである。

見習修行として働く女中には将来、結婚して家庭をもつという目標があった。そのため、辛い仕事にも耐えることができた。これに対して中高年者が多数を占める家政婦には、夫と離別・死別した者も多い。

「面倒くさい家庭なんかこりごりだわ。独りのほうがどれだけ気楽だかしれないわ」。家政婦の寄宿舎では、お互い、そんなことをよく云い合う。よその家庭をのぞいて帰ってくる女たちだけに、その意見には具体性と実感がこもっていた。だが、この意識の中には、そんな脆さを持っている家庭を羨む気持ちが根を張っているのだった。

要するに、彼女たちは働いている家庭から見れば<sup>よそ者</sup>である。その家庭の雑務にこき使われるための便利さで働いているだけだが、主婦が猫のように甘い声を出そうとも、いざとなれば、その家庭の中には一歩も近づけない<sup>よそ者</sup>扱いであった。

しかし、そういう家庭を彼女たちは持ちたい。なぜなら、彼女たちの多くは曾て築いた自分の家庭からの追放者か、破壊者であった<sup>41)</sup>。

家庭を持てない劣等感、身寄りのない孤独感、<sup>よそ者</sup>扱いされる疎外感、人格無視の被虐心理。これらがあいまって主人公の陰湿なキャラクターを作り出した。『熱い空気』は、家事使用人が家庭のなかの“他人”である事実を、家政婦の目を通して読者に突きつけるとともに、主人公の屈折した心理とそれにもとづく卑劣な行為をリアリティをもって描きす。

ドラマ『熱い空気』の監督もつとめた演出家の鴨下信一は、この作品が発表された時代をふり返り、「今とは比較にならないくらい〈運の不平等〉が小説の大きなテーマだった」<sup>42)</sup>と述べている。夫に裏切られ、雇主からも蔑まれる信子はまさに、不運な人の代表である。信子の行為を非難するのはたやすい。しかし、当時の読者の多くは、不謹慎であるとわかっていても、彼女に対し時にはエールを送ったにちがいない。なぜなら読者もまた、信子その人であったからだ。

#### 【注および引用文献】

- 1) 放送期間は2011年10月12日～12月21日。制作局は日本テレビ。脚本は遊川和彦、チーフ プロデューサーは田中芳樹、演出は猪俣隆一ほか。おもな出演者は松島菜々子、長谷川博己、相武紗季、惣那汐里、中川大志、綾部守人、本田望結、平泉成、白川由美。なお、この作品は「ドラマ・オブ・ザ・イヤー2011」「2012年エランドール賞」など多くの賞を受賞した。
- 2) ビデオリサーチの調査による。視聴率は関東地区のものである。なお、『家政婦のミタ』の視聴率は、年

- 間を通して同年12月31日放送の『第62回NHK紅白歌合戦』第2部41.6%に僅差で迫るものである。
- 3) 2011年1月24日「日本経済新聞 電子版」には、ドラマ最終回が放送された2011年12月21日には、パート主婦の早退が続出したスーパー、ドラマ放送時間帯の売り上げが減ったカフェの事例が報告されている。田中陽『『家政婦のミタ』が見たニッポンの風景』日本経済新聞電子版2012年1月24日。
  - 4) 『家政婦のミタDVD-BOX』(バップ、2012年4月18日発売)による。
  - 5) 『家政婦は見た』の脚本家・遊川和彦は、「3.11の震災とも繋がりますよね。ある日いきなり大きな存在が消えた喪失感をどうやって癒やすのか、そこからどうやって立ち上がるのか。そんな時に力になるのは、自分達よりも更に深い傷や悲しみを負っている人かもしれない。そんなところから、あの暗い三田のキャラクターが生まれました」。遊川和彦「現代ドラマのヒロイン像～『家政婦のミタ』という逆説」、TBSメディア総合研究所編『調査情報』第505号、2012年3月4日
  - 6) 遊川和彦、前掲記事。
  - 7) 平成22年国勢調査に用いる職業分類にもとづく。
  - 8) 総務省『平成17年国勢調査報告』による。
  - 9) 『家政婦のミタ』のプロデューサー大平太は、脚本家よりアカの他人である家政婦の視点で家族を描くという提案が提示されたとき、「外的因子が入ることで起きる化学反応が面白いと感じた」と述べている。「視聴率40%「家政婦のミタ」ヒットの秘密 プロデューサー・大平太氏に聞く」日本経済新聞 電子版、2011年12月22日。
  - 10) 清水美知子『〈女中〉イメージの家庭文化史』世界思想社、2004年、3-4頁。
  - 11) 上野千鶴子『上野千鶴子が文学を社会学する』朝日新聞社、2000年、285頁。
  - 12) 清水美知子「吉屋信子の小説にみる大正末～昭和戦前期の女中像－『三つの花』『良人の貞操』を中心に－」『関西国際大学研究紀要』第12号、平成23年3月
  - 13) 松本清張作品を整理・紹介した加納重文は、「膨大すぎて、正確には数え切れない」と述べている。加納重文『松本清張作品研究』和泉書院、2008年、1頁。
  - 14) たとえば、國學院大學教授の樋口清之は、松本清張について「着想の多角的なのに驚嘆するのである。私は長いあいだ、考古学によって古代文明を研究する仕事をしてきたつもりだが、近頃はどうも、私より向こうのほうが本職になったみたい、専ら高説を拝聴する立場になってしまった」と述べている。樋口清之「随想松本清張」『松本清張全集第7巻月報』文藝春秋社、1972年、6頁。
  - 15) 郷原宏『松本清張事典決定版』角川学芸出版、2005年、6頁。
  - 16) 林悦子『松本清張 映像の世界－霧にかけた夢』ワイズ出版、2001年、9頁。
  - 17) 加納重文『松本清張作品研究』和泉書院、2008年、249頁。
  - 18) 松本清張『事故 別冊黒い画集』文藝春秋新社(ポケット文春120)、1963年、裏表紙。
  - 19) 柴栄三郎監修、大沢家政婦研究会編『家政婦は見られた!』音羽出版、2000年、96頁。
  - 20) 当時、霧プロ(松本清張の小説を映像化する会社)に勤務していた林悦子は、「松本清張の小説のなかには所謂シリーズ物と言われる作品は皆無」と述べている。林悦子『松本清張映像の世界－霧にかけた夢』2001年、ワイズ出版、43-44頁。
  - 21) 『家政婦のミタ』の脚本家である遊川和彦自身も、この作品を『家政婦は見た!』のオマージュと述べている。
  - 22) 2009年から2010年にかけて発売された5巻からなる『家政婦は見た!DVD-BOX』においても、第1話は収録されていない。なお、第1話のDVDは2009年、『松本清張サスペンス土曜ワイド劇場傑作選(大映テレビ)』作品のひとつとして発売された。
  - 23) 清水美知子、前掲書、99-100頁。
  - 24) 清水美知子、前掲書、103-104頁。
  - 25) 清水美知子、前掲書、106頁。
  - 26) 清水美知子「〈派出婦〉の登場－両大戦間期における〈女中〉イメージの変容」『関西国際大学研究紀要』第4号、2003年。
  - 27) 篠塚英子『女が働く社会』勁草書房、1995年、226頁。
  - 28) 清水美知子、前掲書、186-191頁。
  - 29) 清水美知子、前掲書、192-200頁。

- 30) 松本清張『松本清張全集第7巻』文藝春秋，1972年，98頁。
- 31) 調査結果は，翌1961年，『通勤家事使用人の実情』（婦人労働調査資料第38号）として公刊された。
- 32) 850円という高額な日給が支払われているのは，1960年代前半の物価上昇が著しく，賃金上昇につづけていることにくわえ，信子が“住み込み”（24時間拘束）として勤務しているからであろう。1963（昭和38）年の国家公務員（大卒）の初任給は17万1千円であったから，信子の月平均2万5千円という月収は，その額だけを見れば彼女自身が述べているように決して低いものではない。
- 33) 松本清張，前掲書，101頁。
- 34) 松本清張，前掲書，103頁。
- 35) 松本清張，前掲書，109頁。
- 36) 松本清張，前掲書，119頁。
- 37) 松本清張，前掲書，141-42頁。
- 38) 松本清張，前掲書，168頁。
- 39) たとえば，1954年に雑誌『小説新潮』に発表された由起しげ子『女中ッ子』は，主人公の女中ハツが，家族のなかで持て余されている末っ子，勝美に愛情を注ぎ，彼を守るために盗みの濡れ衣を着せられたまま主家を去る，というストーリーである。
- 40) 松本清張，前掲書，169頁。
- 41) 松本清張，前掲書，136頁。
- 42) 鴨下信一『誰も「戦後」を覚えていない〔昭和30年代篇〕』文藝春秋，2008年，69頁。

#### 【参考文献】

- ・由起しげ子『女中ッ子・この道の果てに』新潮出版，1955年。
- ・加藤秀俊『文芸の社会学』PHP 研究書，1979年。
- ・志村有弘・歴史と文学の会編『松本清張事典 増補版』勉誠出版，2008年。
- ・森永琢郎監修『明治・大正・昭和 物価の文化史事典』展望社，2008年。
- ・杉山邦彦他編『家政婦のミタ エピソード・ゼロ』日本テレビ，2011年。
- ・井上忠司『「縁」の人間関係 文化心理ノート』書肆クラルテ，2012年。